

# 日本統治期台湾の〈日本語文学〉

河原 功

和泉司著

日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉  
——〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉



A5判 448頁  
ひつじ書房  
[6930円]

本書は、台湾近現代史を見据えながらの徹底した資料調査、詳細なテキスト分析による「日本統治期台湾における文学運動を〈文壇〉という観点から考察を試みた」好著である。

日本統治期台湾の文学運動としては、台湾人側によって旧文学打倒を叫ぶ白話文運動、さらに白話文に対抗して台湾話文を唱える郷土文学論争が展開されたが、本書では台湾人及び在台日本人による〈日本語文学〉運動を、日本帝国の〈中央文壇〉との関わりの中で捉え直そうという視点から論じている。対象とする時期は、日本が台湾を植民地としていた五十年間のうち、〈台湾文壇〉が形成され機能する一九三〇年代、四〇年代前半ということになる。

本書の内容は二部構成となっている。

第一部 憧れの〈中央文壇〉——回路としての〈文学懸賞〉

第一章 日本統治期台湾における〈日本語文学〉の始まり

第二章 『改造』懸賞創作の行先——〈文壇〉と〈懸賞〉

第三章 懸賞当選作としての「パイパイのある街」

第二部 〈自律〉を模索する〈台湾文壇〉

——〈中央〉との接続／切断

第四章 西川満と黄得時

——四〇年代〈台湾文壇〉を考えるために

第五章 青年が「志願」に至るまで

——周金波「志願兵」論

第六章 新垣宏一「砂塵」論

——もてあまされる〈皇民化運動〉

第七章 錯綜する〈内〉と〈外〉

——四〇年代〈台湾文壇〉における「蓮霧の

「庭」と龍瑛宗

第八章 〈皇民文学〉と〈戦争〉

終章 日本統治期後の日本語作家たち

第一部は一九三〇年代の台湾での文学活動、台湾人による〈日本語文学〉運動に焦点を当てて、彼らが日本国内の〈中央文壇〉との関わりを求めながらどう文学運動を展開していったのかを検証している。それを〈中央文壇〉の文学懸賞の面から捉える。

〈中央文壇〉の文学懸賞で最初に受賞したのは楊逵<sup>き</sup>「新聞配達夫」で、一九三四年に『文学評論』の第二席に入選した。楊逵に続いて、三五年に張文環「父の顔」(『中央公論』)、翁鬧<sup>ど</sup>「懸爺さん」(『文芸』)の〈中央文壇〉進出が報じられたが、両作品とも選外佳作のため雑誌掲載にはならなかった(和泉は「懸爺さん」と誤記している。意味はどちらも「愚か」だが、「懸」<sup>ど</sup>「懸」は異なる漢字である)。

ところが、三七年に龍瑛宗「パイヤのある街」が『改造』第九回懸賞創作に入選した。(『台湾文壇』とコネクションのない無名の龍瑛宗の入選は台湾で衝撃的なことだった。だが、龍瑛宗の入選は、一等、二等でもない、佳作にも達しない「佳作推薦」という、「パイヤのある街」のためにだけ設けられたお情け的な賞であった。和泉は、ここに張赫宙の「二匹

目の泥鰻<sup>どじょう</sup>」を狙った『改造』の編集戦略上の思惑が影響していた、と分析する。

一九二八年に始まる『改造』懸賞創作(二九年まで一〇回行われた)は、すでに大江賢次「シベリヤ」(第三回)、田郷虎雄「印度」(第四回)、朝鮮半島出身者の張赫宙「餓鬼道」(第五回)を入選させていた。したがって、「佳作推薦」という苦肉の策を弄してまでも「パイヤのある街」を入選させたのは、国際性や時事ネタ、異国性の物珍しさを入選させることで海外や外地への販路拡大を狙った『改造』の営業戦略であったとする。

いっぽうの龍瑛宗にしても、植民地のよく知られていない事例をテーマに取り上げると入選しやすいと読み取って、『改造』編集部受けする作品を書いて応募したのだ、と和泉は龍瑛宗の戦略を分析していく。朝鮮の次は台湾だ、つまり張赫宙の次は自分だと策を練って書かれたのが「パイヤのある街」だったとする。「パイヤのある街」は『改造』編集部が関心を持ちそうなテーマが片端から書き込まれているのであって、散漫で面白みがなく、日常的な台湾中部の街のスケッチに過ぎないと、台湾でも評価が低く、龍瑛宗は厳しい批判にさらされる。

懸賞創作の応募者が戦略的だということは、なにも龍瑛宗

に限らない。拙著『翻弄された台湾文学』（研文出版、二〇〇九年）でも取り上げたが、楊逵にしても同様である。楊逵の「新聞配達夫」は、その前編はすでに台湾の新聞『台湾新民報』に掲載されたもので、後半が発禁となったため、前後編一緒にして応募したところ、幸い入選となった作品である。未発表のものに限るとした『文学評論』の募集規定を無視しての応募だった。さらに、「新聞配達夫」は、土地の強制買収をはかる台湾の製糖会社の暴挙と、それに加担する警察権力を暴露している内容だけに、掲載誌『文学評論』は台湾で発禁となった。つまり、台湾の読書市場に入選作「新聞配達夫」は出回らなかつたのである。にもかかわらず、「新聞配達夫」が台湾で広く読まれたような錯覚を与え、楊逵が台湾新文学の旗手として高い評価を得たのは、楊逵自身がいくつかのペンネームを使い分けて、たとえば「王氏琴」という女性名目で用いて書評を書き、自作の紹介を重ねていったからだった。文学懸賞に応募する段階でも、入選後に自己PRに努める段階でも、楊逵はしたたかであつたわけである。

『改造』懸賞創作登場後、『中央公論』を初めとして多くの雑誌・文芸誌が純文学の〈文学懸賞〉企画を一般化するようになる。読者層を広げ、作家への道を用意した意味で、『改造』の貢献度は高い。だが、『改造』懸賞入選者の多くが程なく

して文壇から姿を消していくのは、入選作品を誌面に載せていない事例のあることから、『改造』に作家を育てる意志がなかつたからだ、と和泉は指摘している。

『改造』文芸懸賞を軸にして、その実態分析をはかり、そこから台湾文学研究に迫ろうとしたのは和泉が初めてのことである。

第二部は、一九四〇年代に〈台湾文壇〉形成という方向に向かつた中での〈日本語文学〉の展開を検討するものである。

四章では一九四〇年代に〈台湾文壇〉で大きな影響力を持った西川満と黄得時を取り上げて、それぞれが拠つた文芸誌『文芸台湾』と『台湾文学』の相違点を明確にする。〈中央文壇〉を意識しつつも〈台湾文壇〉の中心に君臨しようとした西川満、それ故に西川は強権的だと批判され続けてきた。それに對して台湾で台北高校、台北帝大という高学歴コースを歩み、文芸誌『台湾文学』で文芸理論家として台湾人主体の〈台湾文壇〉を守ろうとしたのが黄得時であつて、和泉はその黄得時を再評価する。

五章では、〈皇民文学〉の代表とされてきた周金波「志願兵」を論じ、「志願兵」は『文芸台湾』の編集サイドによるキャンペーンに添って書かれた作品だ、と断ずる。周金波は「志願兵」によって、『文芸台湾』側の期待によく応え、『台湾文

学』側の文芸理論に対する「盾」となっていた、と和泉は説く。周金波は『「文芸台湾」で〈皇民作家〉という形で利用されていく』不幸な役割を担われたわけである。(皇民文学)の定義が曖昧ななか、周金波を〈皇民作家〉と安直に決めつけることは厳に慎まなければならない、と和泉は主張する。

六章では、台北帝大卒業後に台南第二高女の教員となった新垣宏一と、その作品「砂塵」を論じる。生徒と接する主人公の言動から、「生徒ときちんと向き合っていない」、「在日日本人であるが故の傲慢さの発露」、「非常に中途半端であり、未熟」、「結果的に皇民化教育の皮相さを暴いたテクスト」、「台湾」内部の支配―被支配構造に向き合おうとしなかった」、「皇民文学」という枠組をまるで尊重していない、「皇民化運動」を自身の問題として理解しておらず、完全に他者

の問題としている」と、作品「砂塵」を酷評している。和泉のこの徹底した新垣批判は、痛快と言えるほどの鮮やかさである。

七章は、再び龍英宗に戻って、今度は「蓮霧の庭」を論じる。西川満主宰の『文芸台湾』陣営にいて、台湾銀行の下級行員でしかなかった龍英宗は、やがて西川満のコネクションで『台湾日日新報』学芸部に転職する。西川満に完全に取込まれているというのが和泉の龍英宗評である。「蓮霧の庭」は在日日本人と台湾人の交流をテーマにした作品だが、支配者側の在日日本人と文学同人活動をしながら、銀行員、新聞社社員という職に就いて生きていかざるを得ない龍の悲劇性が反映されている。作品は対立誌『台湾文学』に移籍した龍が最初に書いたもので、高級果物「パイヤ」から台湾土着

中国語の文法的意味と表現形式の対応を探る

# 中国語文法の意味とカタチ

木村英樹 著 「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究

現代中国語の文法的現象を取り上げ、文法的意味と形態、および文法的意味と構造の対応のありようを明らかにする。第I部 タイクシスをめぐる、第II部 アスをめぐる、第III部 ヴォイスをめぐる、第IV部 構文をめぐる、付・索引

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

## 新刊 □ 汉语意合语法研究

张黎 著

——基于认知类型和语言逻辑的建构

第1章 意合语法的理论研究 / 第2章 汉语语时制的认知类型学研究 / 第3章 汉语动相的认知类型学研究 / 第4章 汉语语态和句式的认知类型学研究 / 第5章 汉语主观性结构的认知类型学研究 / 第6章 汉语方所结构的认知类型学研究 / 第7章 意合语法的理论争鸣 (附录) 付・索引

A5判 ■ 5040円

白帝社

のありふれた果物「蓮霧」になったことから、龍の視点が外部の〈中央文壇〉志向から内部の〈台湾文壇〉志向に大きく変換したことを意味する。懸賞作家というイメージからの脱却、西川満の呪縛からの解放、周囲の自分に注がれる偏見の排除を願っての自信作として「蓮霧の庭」を発表した。しかし、作品では「内台交流」は確かにあるものの、どうしても双方に入り込むことの出来ない限界があつて、結局〈皇民化運動〉の空転、空洞化を示してしまつたことになる。

八章は王昶雄の「奔流」、周金波の「助教」を問題にして、戦争動員を控えた台湾人青年が皇民化されていく過程と、それでいて「日本人」になりきれない矛盾を衝いて、〈皇民文学〉の空転を再度確認する。

そして終章では、敗戦／光復直後の台湾の言論事情を確認し、そのなかで時代に追従することで作家としての自らの地位を図ろうとしたのが龍瑛宗であつたことを証明する。

四六年一〇月まで、台湾では日本語による新聞や雑誌の発行が認められていた。だが、敗戦からほぼ一年後という短時間で中国語に切り替えてしまふ国府政権の強引さが、文芸界や読書市場にどれほど大きな混乱を与えたかについて、私個人として関心をもっている。それだけに、この終章ではそのことについてもう少し検討を深めて欲しかった。

しかし、台湾文学を論ずるに当たつて、〈中央文壇〉の懸賞創作を軸として論じ、さらに皇民化を扱つた作品分析から〈皇民文学〉の空転を論じたのは斬新であり、説得力がある。台湾文学を理解するよき研究書として、そして一九三〇年代、四〇年代の台湾状況を知るうえでも、是非とも推薦したい一書である。

(かわはら いさお 東京大学非常勤講師)

#### 中国西南秘境の声 雲南省ブール少数民族歌舞来日公演

ワ族・ラフ族・タイ族の歌舞を紹介▼日時：10月19日(金) 19時、20日(土) 13時半／18時半、21日(日) 13時半▼会場：日中友好会館大ホール(東京都文京区後楽1の5の3) ☎03-3815-0685  
\*都営大江戸線「飯田橋」駅C3出口1分、JR総武線、地下鉄東西線・有楽町線・南北線「飯田橋」駅A1出口7分▼チケット：前売一、〇〇〇円(全席指定)／当日一、二〇〇円(空席がある場合のみ販売) \*イープラス <http://eplus.jp>、ファミリーマートで販売中▼展覧会「ブール印象展」9月27日(水)～10月21日(日)、中国物産展10月19日(金)～21日(日) 同時開催\*入場無料